

## 事例 4

### 「不良交友」が予測される高校生への予防的な指導援助の事例

1. 予測した問題行動 不良交友
2. 対象 高等学校1年 女子 (A子)
3. 問題行動予測の動機

一見したところ、ごく普通の生徒に思えたが、入学後2カ月の間に気になることがあった。

- ・ 突然、赤いソックスで登校し、注意された。その時のやりとりの中で、ふだんのA子にそぐわない自己顕示欲が感じられた。
- ・ 担任が学年初回面接に際して、家族のことを尋ねると表情がこわばり、「関係ない」という。

#### 4. 資料

##### (1) 既存の資料

- ・ 本人の成績 (入学時) 462番中122番  
(5月末中間考査) 276番
- ・ 部活動 (中学) プラスバンド部  
(高校) 未参加

(2) 面接及び検査からの資料 (家族・友人関係を中心にさりげなく資料収集した。)

- ・ 教研式PUPIL検査 (4月実施6月判明) 規範性はあるが、同時に衝動・神経質傾向も強く、学校・教師・家庭への不信感が強い。
- ・ 本人との面接 (6月、家庭訪問から)

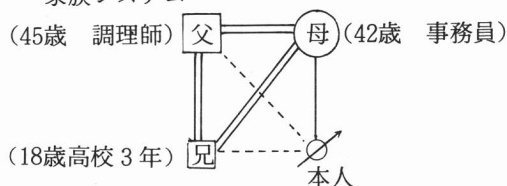
中学生の時、さ細なことから部顧問と対立。顧問・担任・両親にしかられた。言い分を全く聞いてもらえず、悲しかった。両親は優秀な兄に期待している。自分は不本意な入学だったこともあり、成績も悪く、やる気もわからない。

- ・ 母親の話。(7月、家庭訪問から)

高校入学後、意欲もなく、遊び中心型の友達に変わってきた。男の声で電話があり母親が受話器

を取ると切れてしまうことがあった。

- ・ 親子関係診断検査 (8月、家庭訪問から) 父親、母親ともに拒否傾向が強い。父親は厳格さで、母親は期待感で危険ゾーンにある。母親は普通に愛情を表現しているつもりであるが、A子はそう受け止めておらず、疎外感が強い。
- ・ 家族システム



#### 5. 予測診断 (診断)

両親の期待が兄に集まり、本人に対する養育態度には拒否的なものがあった。そのためA子の心の奥で家庭に対する不信・不満の念が強く、それが学校生活にも投影されている。また、不本意入学だったこともあり、目的意識が見い出せないまま成績も低下し、家族関係の中の孤立からくる不満を外での交友関係で晴らそうとする傾向がある。基本的に規範性はあるため、現時点で問題行動は顕在化していないが、もし適切な指導援助がなされないならば、「不良交友」に至ることが予測される。

#### 6. 予防仮説 (指導仮説)

担任を主体とする指導援助とする。

##### (1) 本人に対して

チャンス相談を通じて自然なラポールをつくる。心の中の不満を吐き出させ、浄化を図りながら、新たな目的意識を求めさせる。

##### (2) 家族に対して

両親に対して、家族関係を見直し、一緒に行動